

---

# 微妙な距離のふたりに5題

未五月 悠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

微妙な距離のふたりに5題

### 【著者名】

未五月 悠

Z3534F

### 【あらすじ】

幼なじみの女の子と男の子の話。告白を手伝ってと頼まれた。その片思い相手は幼なじみの男の子。

## 1・隣同士がいちばん自然

「ねえ直つて羽生君と幼なじみだよね？　てことはちょっとぐらい呼び出しどかしてみても大丈夫だよね？　だったらちょっとお願ひがあるんだけど、あたしの友達が羽生君好きなわけよ。協力してくれない？　いいよね？　大丈夫だよね？」

言つだけ言つて、加奈子はさつさと図書館から出て行つてしまつた。

おい、私の話も聞けよ。誰もいいだなんて言つてないだろ？  
……とか、言いたくても、もういないし。私はひとつ溜め息をついた。

加奈子が悪い子じゃないのは知つてゐる。人懐っこいし、軽く人見知り気味な私にも気軽に話しかけてくれる。  
でもそれつて、逆に言つと人のこと気にしない自己中だよね。そういう人つて、正直あんまり得手じゃない。  
軽く頭を振つて思考を停止させる。

今考えるべきは加奈子のこと、じゃなくて。

私は彼女が来る直前までやつていた、本の整理を再開した。

夕暮れの道をとてとて歩く。

電車の中までは友達と一緒にでも、降りたらもう一人。

ぶるる、ポケットの中で携帯が鳴る。

あ、学校出たのにまだマナーモードにしてはなしだつたんだ。

出してメールを見る。……加奈子だ。

はいはい何ですかまた恋愛話ですか。あなたは恋のキューピッド気取りか何かですか。

そこまで考えることができても、実際本人に言えない私はチキンだ。

『明日放課後にカモメ公園に呼び出してください』

おいおいおい、私の意向は完全無視ですかい。せめて語尾にはやじるじじゃなくクエスチョンマークぐらいつけてくれ。ついで私が協力することは決定事項ですか。

明日までに会わなかつたらどうするつもりだ。

「あれ、直？ 帰り時間被るとかめずら」

後ろからの脳天気な声に、また溜め息ひとつついで私は立ち止まる。

「……そうだね、晶」

学ランの、どこかひょろつとした影。件の羽生晶が、私の隣に並ぶ。

隣にいると高く感じるけれど、男子の中にいると晶はあんまり大きくない。ホームで一番背が高い女子と比べるとビックリビックリだし。

「早いね、どしたの？」

「今日はうるせー女がいなかつたからさあ

「煩い女?」

一瞬加奈子のことが頭に浮かんだ。

その“友達”とくつつけようと加奈子が頑張つたら……煩いだろうなあ。間違いなく。

夕日がゆっくり角度を変えてくる。私は少し目を眇める。

「地味な奴なんだけど、ピアノ弾け弾けって煩くて。俺はオルゴールでもCDでもねーっつーの」

ああ、もしかしてその子が加奈子の“友達”かな。  
さすがは加奈子の友達、類友か。

「ねえ、どんな子?」

晶は少しだけ上を見る。その顔を私が見上げる。  
いつの間にか、身長、差が開いてる。小6……つづん、中2まで  
は私のほうが高かったのに。  
なんかちょっとムカついて、髪の毛引っ張つてみた。

「えい

「痛つ！ なんだよいきなり！？」

「気にしないでいいよ。どんな子？」

「気にすんなつて……」

晶はちゅうと眉を歪めるも、話を続ける。

「とにかく俺に弾かせたがるんだよ。俺別にクラシックなんて好き  
じゃねーのに」

「弾かなきやいいじゃない」

「きやあきやあひるセーの」<sup>ヒ</sup>」

「……それは弾くね」

むしろ弾くね。晶はクラシックよりポップスのほうが好きだし。ポルノうまいんだよね。中学の時、晶の家に行って弾いてもらつたつけ。私歌うの好きだから合わせて歌つたりして。

「ねえ、弾いてよ♪アノ」

「は？ どこで？」

「晶んち。行！」

数歩、ととんと先に出る。とたんすぐに晶が並ぶ。奴め、大股で歩きやがつた。

ステップ踏むように前に出る。また並ばれる。ムキになつて前歩いて、すぐ晶も並んで。

「なんですよ」

「私も聞きたくなつたの。悪い？」

「悪いとは言ってねえけど」

「ならいいよね？」

隣に晶。足を緩めてもそれは変わらない。うん、やつぱりこれが、一番自然。

「ポルノ弾いてよ、ポケット。メリッサ歌いたい」

きーみのつてつで、と出だしを歌つ。晶が苦笑する。だつてほり、中学んとき一番歌つたの、これだし。

「いいけど大声出すな  
「わかつてゐるつてば」

隣に、晶。  
隣同士が一番自然。

END .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3534f/>

---

微妙な距離のふたりに5題

2011年1月16日00時59分発行